

## ● 論 文 ●

## 『枕草子』に描かれた男性の宿直装束について

中 井 真 木

Reconsidering the Attire for Night Duty as Depicted in the *Pillow Book*

Maki NAKAI

## Abstract

The *Pillow Book* (*Makura no sōshi*) of Sei Shōnagon contains detailed depictions of the Japanese court at the end of the tenth century and has been one of the most important sources to understand the clothing and customs of the day. Yet, in many parts of the book, what is actually depicted still remains obscure, partly because of variations and corruptions in the extant versions of Sei Shōnagon's text, and partly because few other contemporary materials are available to help our understanding. As an attempt to enlarge our understanding of the text and the sartorial customs it portrays, this article focuses on several scenes in which Sei Shōnagon depicts male attire for night duty. Making use of materials that previous studies seem to have overlooked, it suggests a possible new interpretation of those scenes.

One scene is that depicting "the attire for night duty" (*tonoi sugata*) of young courtiers walking in the snow. While this scene has been considered to be simply a picture of one snowy day, comparison with manuals for courtiers from a later period strongly suggests that this is actually a scene where courtiers are dispatched for a ceremonial roll call held on the occasion of the first snow of the year. The article also focuses on the contrast that Sei Shōnagon draws repeatedly in various night scenes between courtiers of the fourth or fifth ranks wearing *nōshi*, a type of robe not defined in official codes, and those of the sixth rank wearing official robes. The existence of a rule that courtiers of the sixth rank or lower were not allowed to wear *nōshi* indicates that a clear distinction between the fifth and the sixth ranks existed even in the attire for night duty. This same circumstance further

suggests that *nōshi* became a symbol of courtiers of the fifth rank or higher, which helps to explain Sei Shōnagon's repeated admiring references to this mode of dress in the *Pillow Book*.

清少納言の『枕草子』は、文学作品としての評価もさることながら、10世紀最後の日本の朝廷の様子を詳細に描いた作品として高い価値を持つ。その中には服飾に関する記述も多く、それらは当時の服装について知るための参考とされ、また『枕草子』そのものの理解のためにも、盛んに研究されてきた<sup>1</sup>。筆者はこれまで平安・鎌倉時代の男性の服飾を研究してきたが、この分野においても、『枕草子』は男性の日記等からは知ることの難しいさまざまな情報をもたらしてくれるものであり、最重要文献の一つである。しかし、『枕草子』には古写本がなく、異なる系統の伝本間で異同が大きいために、原態が完全には不明であることに加え、同時代史料が豊富とは言えないこと等から、いったい何が描かれているのか、それが何を意味するのかについて、説の定まらない場面も多く残されている。筆者はそれらについて必ずしも明確な答えを持つものではないが、男性の宿直装束について考える中で、これまでの諸注釈や論考では見落されてきたのではないかとと思われる点にいくつか気付いたので、それらについて小論で論じてみたい<sup>2</sup>。

## 1. 殿上の宿直

はじめに、『枕草子』の時代の男性官人、特に小論で取り上げる蔵人や殿上人の宿直の習慣とその服装について確認しておく。全ての官人に宿直の義務があることは、8世紀に制定された令に規定されているが<sup>3</sup>、特に衛府の官人や、天皇の身辺を警固する内舍人、天皇に近侍する侍従等にとって、宿直は重要な職務であった<sup>4</sup>。9世紀に入り、天皇の近くに祇候する秘書官や近臣として、蔵人や殿上人を任命する制度が整備されると、彼らにとっても天皇の居住する清涼殿での宿直（殿上の宿直）は重要な職務となった。彼らには毎月果すべき職務として、日勤や陪膳のほかに宿直の回数が定められており、勤務実績は毎日記録され、月末に集計された<sup>5</sup>。

一方、官人の服装は、令や格式によって官位ごとに定められていたが<sup>6</sup>、殿上

の宿直に際しては、遅くとも10世紀末には、日中とは異なる宿直用の服装が用いられた。11世紀前半頃の蔵人や殿上人の職務や規範等について記したと見られる文献によれば、彼らは夜には「宿衣」を着用して点呼（名謁）に臨み<sup>7</sup>、宿直が明けて「日給の簡」に勤務が記録されると、宿所下って朝服（束帯）に改めることになっていた<sup>8</sup>。この「宿衣」には、遅くとも10世紀末には、大きく分けて2つの様式が用いられていたことが広く知られている。すなわち朝服と同じく、位階に応じて定められた色の上着（位袍）に、指貫という袴の一種を用いる様式（いわゆる衣冠<sup>9</sup>）と、位袍には使われない色の上着（直衣）と指貫を用いる様式である。指貫は朝服の袴より幅広で、動き易いものであったと見られる。

## 2. 「宿直姿にひきはこへて」は通常の宿直の姿か？

さて、『枕草子』には男性官人のさまざまな宿直姿が記されているが、中でも宿直姿そのものを主題として描いているのが、次の一連の記述である。

雪たかうふりて、いまでも猶ふるに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、上の衣の色ときよらにて、革の帯のかたつきたるを、宿直姿にひきはこへて、紫の指貫も雪に冴へ映へて、濃さまさりたるをきて、相の紅ならずはおどろおどろしき山吹を出だして、唐傘をさしたるに、風のいたうふきて、横ざまに雪をふきかくなれば、すこし傾けてあゆみくるに、ふかき沓・半靴などはゞきまで雪のいと白うかゝりたるこそ、おかしけれ。

細殿の遣戸をいとうをしあけたれば、御湯殿に馬道より下りてくる殿上人、なへたる直衣、指貫の、いみじうほころびたれば、色々の衣どものこぼれいでたるを、をし入れなどして、北の陣ざまにあゆみゆくに、あきたる戸の前を過ぐとて、纓をひきこして、顔にふたぎていぬるもおかし。<sup>10</sup>

ここでは、「上の衣」を「宿直姿にひきはこへ」た四位・五位の官人が傘をさして吹雪の中を歩く姿と、宿直明けに着崩れた直衣姿で清涼殿から出てきて、宿所に向かう殿上人の姿<sup>11</sup>が連続して描かれている。1つめの雪の場面では、束帯の

革の帯（石帯）<sup>12</sup>の跡がついた袍（上の衣）の、後身頃をたくしあげて（ひきはこへて）着ているものと一般的に解されており、位袍と指貫が用いられている。一方、2つめの早朝の場面では、「なへたる直衣」と指貫の組み合わせが描かれており、あわせると、上で見た2種類の宿直装束が両方描かれた貴重な記述と言える<sup>13</sup>。

しかし、この部分を続けて読んでみると、素朴な疑問が湧いてこないだろうか。はじめの場面は、それまで着ていた束帯の石帯を外し、袍の裾をたくしあげて歩いて来る場面であり、着崩れた姿の描写もなく、「宿直姿」とはいっても、宿直明けではない印象を与える。事実、例えば五味文彦は、この場面を「宿直のためにやってくる殿上人の姿を描いている」と解釈している<sup>14</sup>。ところが続く宿直明けの様子を描いた段では、殿上人は今度は直衣を着ている。なぜ宿直前と宿直明けで異なる服装が描かれているのだろうか。あるいは、位袍を「ひきはこへ」る様式と、直衣を着用する様式はどのように使い分けられ、またどちらがより一般的な宿直姿だったのだろうか。

この点を考える1つ目のてがかりは、『枕草子』の他の箇所<sup>15</sup>に記された「三月つごもりがたは、冬の<sup>なをし</sup>直衣の<sup>き</sup>着にくきにやあらん、うへの<sup>きぬ</sup>衣がちにてぞ殿上の<sup>とのみすがた</sup>宿直姿もある」<sup>15</sup>（三月末には冬の直衣が着にくい<sup>16</sup>ためか、殿上の宿直姿は位袍が多い）という記述である。なぜ冬直衣が着にくいのかについては諸説あるが<sup>16</sup>、理由は何にせよ、三月末には位袍の宿直姿が多いというこの記述からはかえって、通常は直衣での宿直姿が多かったことが窺われる。

では、雪の中を歩いてくる殿上人の、袍を「ひきはこへ」た「宿直姿」はどのような場面を描いているのだろうか。そもそも、改めて考えてみると、この場面には奇妙なところがある。というのは、官人が宮中で宿直姿になるのは、原則として夜のはずである。実際、前後の時代の文献からは、日中に宿直の装束で殿上に上がることは禁じられていたことが知られる<sup>17</sup>。しかし、大雪の降る日の夕刻以降に、ここで描かれているような、色彩に満ちた鮮やかな景色を目撃することが果たして可能だろうか。

ここで想起されるのが、すこし後の時代の文献ではあるが、12世紀後半頃に成立したと見られる『助無智秘抄』に、初雪の日には袍に指貫を着るとされている

ことである。

### 初雪日

侍中、アライロ、オリモノノサシヌキラキテ、諸陣へムカヒテ見参ヲトルベシ。就中ニ帯刀ノ陣ニムカフ蔵人、ヨウジンスベシ。アライロニアラズトモ、タビレイノ装束ヲソクタイニテモキルベシ。<sup>18</sup>

『助無智秘抄』は主に蔵人の服装について記した文献であるため、ここでは通常の位袍ではなく、蔵人の着る青色袍（趨塵袍）に指貫を着ることとされているが、袍に指貫という組み合わせは『枕草子』の雪の場面と同じであり、また青色袍でなく束帯であっても「美しい装束」をすべきとされる点も注目される。

延応元年本系『年中行事秘抄』裏書にも、同じ典拠によると推測される以下の記述が見える。

### 初雪見参事

……但向<sub>二</sub>帯刀陣<sub>一</sub>之人、如<sub>二</sub>装束<sub>一</sub>可<sub>二</sub>用心<sub>一</sub>之。不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>束帯<sub>一</sub>、又本自着不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>脱也。可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>青色・織物指貫<sub>一</sub>。之又必不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着、只可<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>美麗衣冠<sub>一</sub>歟。<sup>19</sup>

この文章はより難解ではあるが、「束帯すべからず、またもとより着るを脱ぐべからず」とした上で、やはり「青色・織物指貫を着るべし」とある。またここでも「美しい衣冠を着るべきか」と「美麗」の文字が見えている。

以上の文献に示された、初雪の日（初雪見参）にとるべきとされる、位袍（もしくは青色袍）に指貫を原則とする「美しい装束」は、『枕草子』に描かれた、革の帯の跡のついた袍を「宿直姿にひきはこへ」、紫の指貫を雪に映えさせ、紅や山吹の美しい相を袍の下から見せた姿とよく似通っている。すなわち、『枕草子』の雪の日の「宿直姿」は、通常の宿直姿ではなく、初雪の日、とりわけ初雪見参の場面を描いたものなのではないだろうか。

この初雪見参とは、その冬最初の大雪（積雪）の際に行なわれる勅計のことである<sup>20</sup>。勅計とは、緊急事態に際して、天皇の命によって諸陣（武官の詰所）の

参仕者を確認することであり、『蔵人式』に規定されていた<sup>21</sup>。具体的な流れとしては、はじめに蔵人が天皇の仰せを奉じて、殿上人を勅使として諸陣に差し向ける。勅使は諸陣の参仕者を数えて清涼殿に戻り、諸陣から追って届けられた見参に署名を加えて蔵人に渡し、蔵人はこれを取り集めて天皇に報告する、というものであった<sup>22</sup>。場合によってはこの見参に基づいて禄が下され、大雪の時の勅計では、諸陣だけでなく、殿上人や内裏女房、内侍所や主殿寮等の官人も見参と賜禄の対象となった<sup>23</sup>。

つまり、初雪の日には、殿上人は勅使として内裏の各所に赴き、そこで参仕者を確認することになっていたのである。この時に指貫を穿いて、裾をたくし上げた宿直姿となるのは、恐らくは雪道を歩くのに都合がよいからであろう<sup>24</sup>。清少納言が愛でているのは、この勅計の勅使として各所に向かう殿上人たちの姿であったと考えられるのであり、この段は、初雪見参の具体的な様相を描写した貴重な史料として改めて見直すことができよう。また、ここから推測を重ねれば、四位や五位の殿上人が位袍に指貫の「宿直姿」を取ることはむしろ稀であり、2段落目に描かれた直衣と指貫の宿直装束のほうが、通常、よく見かけられる姿であったのではないかとも思われるのである。

### 3. なぜ直衣と青色袍・緑袍が対比されるのか？

次に取り上げたいのは、『枕草子』に複数回見られる、直衣と、六位蔵人の青色袍および蔵人以外の六位の緑袍が並べられた記述についてである<sup>25</sup>。これらが並んで描かれる1つ目の場面は、次の部分である。

内のつばね、細殿ほそどのいみじうおかし。……夜よるはまいてうちとくべきやうもなきが、いとおかしき也。沓くつのをと夜一夜ひとよきこ聞ゆるがとゞまりて、ただ指および一つしたゝくが、その人なり、とふと聞ゆるこそおかしけれ。……

又、あまたこゑの声こゑして詩誦しし、歌などうたふには、たゝかねどまづあけたれば、こゝへとしも思はざりける人もたちどまりぬ。いるべきやうもなくて立たちあかすも猶おかしげなるに、几丁かたびらの帷子かたびらいとあざやかに、裾すそのつますこし

うちかさなりて見えたるに、<sup>なをし</sup>直衣のうしろにはころびたえすきたる<sup>だち</sup>君達、六位の蔵人の青色など着て、うけばりて<sup>き</sup>遣戸<sup>やりど</sup>のもとなどにそばよせてはえ立たで、<sup>へい</sup>堀のかたにうしろをして、袖うちあはせて<sup>た</sup>立ちたるこそ、おかしけれ。<sup>26</sup>

ここでは夜の内裏で、男性官人たちが女性の局のあたりを訪れてくる様子が描かれている。特に後段では、大勢の男性が女房の局の近くで詩を誦したり、歌を歌ったりする場面の興を記しており、男性は宿直装束であると考えられるが、具体的には直衣姿の「君達」と青色袍姿の六位蔵人が描かれている（下線部）<sup>27</sup>。「君達」は一般的には上流貴族の子弟を意味するとされるが、『枕草子』においては、「<sup>きんだち</sup>君達は頭中将、頭弁、権中将、四位少将、蔵人弁、四位侍従、蔵人少納言、蔵人兵衛佐」とあるように<sup>28</sup>、必ずしも出自にかかわらず、四位・五位の蔵人・殿上人を指すことばとして使われていると見られる。しかし、一体なぜ、同じ蔵人であっても、四位・五位の君達は直衣であるのに、六位蔵人だけは「青色など着て」いるのだろうか。

同じような対比的な記述は「心にくき物」の段にも見える。

内<sup>つぼね</sup>の局などに、うちとくまじき人のあれば、こなたの火は消したるに、かたはらの<sup>ひかり</sup>光の、ものの上<sup>かみ</sup>などよりとをりたれば、さすがにものあやめはほのかに見ゆるに、みじかさき<sup>〔几帳〕</sup>き丁ひきよせて、いと<sup>ひろ</sup>昼はさしもむかはぬ人なれば、き丁のかたにそひふして、うちかたぶきたる<sup>かしら</sup>頭つきのよさあしきはかくれざめり。<sup>なをし</sup>直衣、<sup>さしぬき</sup>指貫などき丁にうちかけたり。六位の蔵人の<sup>くら</sup>青色もあへ<sup>あをいろ</sup>な<sup>ろうさう</sup>ん。緑衫はしも、あとの<sup>かた</sup>方にかいわぐみて、暁にもえさぐりつけでまどはせこそせめ。<sup>29</sup>

やはり内裏の女房の局を場面とした男女の逢瀬についての随想の一部であるが、恋人の直衣や指貫が几帳にかけられているのを「心にくき物」の一つとして取り上げ、続けて六位蔵人の青色袍もまあ良いが、「緑衫」であれば、几帳には掛けず、後のほうに丸めてしまって、明け方帰る時にも見付けられないほど隠してしまう

のがよい、と述べている。「緑衫」は六位の位袍である緑色の袍を指すと解され、ここでも六位蔵人の青色袍、そして蔵人以外の六位の緑袍が直衣と対比されているのである。

更に「成信の中将」段で、風雪をものともせず女のもとに通う男について語る中でも、同じようにこれらの服装が描かれている。

しのびたることはさらなり、いとさあらぬ所も、<sup>なをし</sup>直衣などはさらにもいはず、<sup>うへ</sup>表のきぬ、<sup>くら</sup>蔵人の<sup>あをいろ</sup>青色などの、いとひやゝかに<sup>ぬ</sup>濡れたらんは、いみじうおかしかべし。<sup>ろうさう</sup>緑衫なりとも、<sup>ゆき</sup>雪に<sup>ぬ</sup>だに濡れなばにくかるまじ。昔の<sup>むかし</sup>蔵人は、<sup>よる</sup>夜など人のもとにも、たゞ<sup>あをいろ</sup>青色をきて、<sup>あめ</sup>雨に濡れてもしほりなどしけるとか。<sup>いま</sup>今は<sup>ひる</sup>昼だにきざめり。たゞ<sup>ろうさう</sup>緑衫のみうちかづきてこそあめれ。<sup>30</sup>

ここでは位階には言及がないが、やはり直衣と位袍、青色袍、緑袍が並んで取り上げられている。なぜこのような記述が繰り返し見られるのだろうか。

この疑問の一つの答えとなると思われるのが、醍醐天皇が発したとされる、六位は雑袍としても直衣を着ることはできないという言葉である。延長8年(930)、醍醐天皇の死の一月ほど前に、臣籍降下した無位の一世源氏が昇殿を許されたため、この人物が殿上に祇候するに際しての処遇について天皇の意向が確認され、公卿の合議によって決定されるということがあった。この中で、直衣の着用の可否についても、天皇に質問がなされたが、これに対する返答の中で、天皇は「六位雖<sub>レ</sub>雑袍<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>服<sub>二</sub>直衣<sub>一</sub>」と述べたというのである<sup>31</sup>。

「雑袍」とは位袍以外の袍を指す概念と見られ、9世紀頃から殿上人に対しては、雑袍の着用を許可する雑袍宣旨が下されていた<sup>32</sup>。後には雑袍という語は直衣とほぼ同義となるが、初期には位袍以外のさまざまな上衣を意味していたらしく<sup>33</sup>、ここでは、六位は雑袍としてであっても、直衣を着ることはできないという認識が示されている。

改めて言うまでもないが、律令官制では三位以上は「貴」、五位以上は「通貴」とされ、六位以下との待遇の差は大きかったが、この差別は服装規範にもしばしば及んでいた。例えば『養老令』衣服令では、位袍の色の区別の他に、五位以上



は牙笏、六位以下は木笏等の規定があり、『延喜式』においても、綾（文様のある生地）の朝服への使用は五位以上にのみ許されるといった各種の規定が見られる<sup>34</sup>。言い替えれば、五位以上と六位以下の立場の違いは、服装を通して恒常的に標示されていたのであり、それが直衣の着用の可否という形で、夜間の宿直装束にまで及んでいたということになる。

このような事情を背景にして、『枕草子』においては、同じ蔵人であっても、五位以上は直衣、六位は青色袍で描かれ、また四位・五位の直衣と六位の青色袍・緑袍が繰り返し対比されていると見られる。また逆に、だからこそ直衣は四位・五位の蔵人・殿上人（君達）の象徴ともなり、称賛の対象となった。『枕草子』では「なまめかしき物」の筆頭に「ほそやかに清げなる君達の直衣姿」があげられている<sup>35</sup>。

一方、その前段の「めでたき物」では、「六位の蔵人。いみじき君達なれどえしも着給はぬ綾織物を、心にまかせてきたる青色姿などのいとめでたきなり」と、六位の綾の青色袍が君達にも着られないものとして称賛されている<sup>36</sup>。先述の通り、朝服の袍であれば、五位以上は綾が着用できたが、青色袍や直衣においては、公卿もしくは禁色勅許を得た者でなければ、綾は使用できなかったと見られる<sup>37</sup>。清少納言が君達の直衣や六位蔵人の青色袍を肯定的に評価し、それに対して通常の六位の緑袍を圧倒的に低く評価する背景には、このような事情があったと考えられるのである。

#### 4. 冬直衣とくろみたる物

同じ蔵人・殿上人の宿直姿でも、六位には直衣が着られず、四位・五位は日常的にこれを着ていたと見られることは、『枕草子』のまた別の段における記述の意味を解き明かすものとなる。それは、先に言及した、三月末には直衣ではなく位袍の宿直姿が多い、という文の意味である。当該部分は、清少納言と藤原行成の交流について記された「職の御曹司の西面の」段の一部であり、清少納言が行成に顔を見せるのを拒み、行成もそれならと、意図的に清少納言の顔を見ないようにしていたところ、三月末のある日、行成とは知らずに顔を見せてしまったと

いう話の中にある。この行成と清少納言の顔を見せる、見せないというやりとりの中で、「三月末頃は、冬の直衣が着にくいのであろうか」という記述は、一見、非常に唐突に置かれているが、管見では、文の切れ目についてこそ議論はあれ<sup>38</sup>、その意味を詳しく説明した注釈はない。

しかし、私見では、清少納言がこのように書いているのは、この後に続く場面で、自分の局の前に見える「くろみたる物」を人違いした事情を説明するためと考えられる。

つとめて、日さしいづるまで、式部のおもとと小廂<sup>こびさし</sup>にねたるに、おくの遣戸<sup>やりど</sup>をあけさせ給て、上の御前<sup>おまへ</sup>、宮の御前<sup>こぜん</sup>出させ給へば、起きもあらずまどふを、いみじくわらはせ給。……

いらせ給てのちも、猶めでたきことどもなどいひあわせてゐたる、南<sup>みなみ</sup>の遣戸<sup>やりど</sup>のそばの木丁<sup>て</sup>の手のさし出たるにさはりて、簾<sup>すだれ</sup>のすこしあきたるより、くろみたる物の見ゆれば、則隆<sup>のりたか</sup>がゐたるなめり、とて見もいれで、猶こと事どもをいふに、いとよく笑みたる顔<sup>かほ</sup>のさし出でたるも、猶則隆<sup>のりたか</sup>なめりとて見やりたれば、あらぬ顔<sup>かほ</sup>なり。浅ましとわらひさはぎて、木丁<sup>かほ</sup>ひきなをし、かくるれば、頭弁<sup>かほ</sup>にぞおはしける。<sup>39</sup>

清少納言は「くろみたる物」を義弟の六位藏人橘則隆と勘違いし、見もしないで式部のおもとと話し続けていると、実はそれは頭弁<sup>きぬ</sup>の行成であったというのであるが、この段の前置き<sup>とのゐすがた</sup>の「うへの衣がちにてぞ殿上の宿直姿もある」は、行成が通常とは違い、位袍の宿直姿であったから、このような人違いが起きたという言い訳ではないだろうか。

この当時の四位の位袍は黒あるいは黒みがかった緋であったと言われ<sup>40</sup>、一方、冬の直衣は白色系であったと考えられている。藏人头の行成は、冬から春の間、白い直衣の宿直姿が通常であったが、一方の則隆は六位であるために、直衣ではなく、青色袍や緑袍を宿衣に着ており、それで清少納言は「くろみたる物」は則隆であると考えたが、実際には黒系の位袍を宿直装束として着た行成であった、というのではないだろうか<sup>41</sup>。

## 5. 夕霧の五節の直衣

ここまで、六位には直衣の着用が許されていないという醍醐天皇の発言を手掛かりにして、『枕草子』における宿直姿の描写について考えてきた。ただ、実はこの醍醐天皇の発言と相反し得る文献が存在している。それは、『源氏物語』少女巻に描かれた、六位の殿上人の直衣である。『枕草子』からは少し離れるが、関連する話題として、最後にこの『源氏物語』の描写について考えておきたい。

その六位殿上人の直衣とは、源氏の息子の夕霧のものである。夕霧は12歳で元服をするが、これに際して、太政大臣の子として当然予想される五位ではなく、六位に叙される。そのため、昇殿を許されたものの、清少納言が否定的に描いていた緑袍（浅葱の袍）を夕霧も疎み、参内せずにいたが<sup>42</sup>、五節に際しては、直衣などを許されたので参内し、天皇以下の称賛を受けたというのである。

浅葱<sup>あさぎ</sup>の心やましければ、内<sup>うち</sup>へまいる事もせずものうがり給を、五節にこつつけて、なをしなどさま<sup>か</sup>ま変はれる色ゆるされてまいり給。きびはにきよなるものから、まだきにおよ<sup>か</sup>すげて、されありき給。みかどよりはじめてまつりて、おぼしたるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。<sup>43</sup>

この六位の夕霧が直衣を許され、その姿で参内したという話の展開は、六位は直衣を着ることができないという醍醐天皇の言と矛盾するが、どう考えたらよいのだろうか。

そもそも、緑袍を疎んでいたが、直衣を許されて参内したというこの話は、ある種のわかりやすさもあってしばしば言及されるものの、史実に照らしてこれが何を意味するのかについては難解で、藤原定家の『奥入』以来、注釈の対象となっており、この点を論じた専論もある<sup>44</sup>。その1つである高田信敬の論によれば、この場面に対する近代の注釈には、五節には直衣着用が広く許されたという説と、夕霧の直衣着用は太政大臣子息として特別に許されたという説の2つがあるが、高田は「まったくの無条件ではないにせよ、殿上人が直衣姿で五節の行事に参加することは容易」と前者を支持する立場を示し、夕霧は「五節なればこそ

の直衣参内慣行をうまく利用した」ものと結論しており、筆者もこれにおおむね同意する<sup>45</sup>。

11月の新嘗祭の2日前（古くは3日前）から始まる五節は、賀茂祭と並ぶ朝廷の一大行事であり、五節舞姫の参入以降、数日間にわたり、蔵人・殿上人が装いを凝らして五節所等をめぐり、飲み騒いだことは、『枕草子』等にも見えている<sup>46</sup>。後代の文献でも、五節の殿上人の服装は直衣が基本となっており、時には日毎に装束を替えたことや、10月1日の更衣の後に出仕を控える等して、夏の薄地の装束を五節に着た者もいたこと等が見えている<sup>47</sup>。なお、このように直衣が着用されたのは、五節所の巡行等が、本来的には夜間の宿直中に行う行事であったためと推測される。

ただし、六位殿上人という存在自体が、11世紀以降、消滅してしまうこともあり、五節であれば六位も直衣が許されたことの証左は、今のところ見出されていない<sup>48</sup>。言えるのは、五節に際して夕霧に直衣参入が認められたという展開が、『源氏物語』の読者に受け容れられ得るものとして描かれたというのみであり、この展開は創作ならではの可能性もある。高田も触れているように、このような見解は、早くは壺井義知が「六位の人直衣をゆる事旧例いまだかんがへず。定めて物語の一体なるべし」として示している<sup>49</sup>。

また、小論の関心からそれより更に重要と思われるのは、五節に直衣が許されたからといって、夕霧に通常時の直衣着用までも許されたわけではないらしいという点である。夕霧は五節の後、また参内しなくなる。もし、通常の宿直にも直衣が許されたのであれば、せめて宿直に参内する場面が描かれてもよさそうなのであるが、そういう展開にはならず、再び、緑袍を厭うて参内に消極的な姿が描かれる。それは起伏ある展開のためだけではなく、六位は直衣が着られないという意識が、やはり前提としてあるのではないだろうか。そうだとすれば、『枕草子』に描かれる直衣は、四位・五位の蔵人・殿上人の象徴的服装であったという小論の主張とも、必ずしも矛盾しない描写として捉えることができるであろう。

## おわりに

小論では、『枕草子』に描かれたいくつかの男性官人の宿直姿について論じ、『源氏物語』の五節の直衣にまで考察を及ぼした。その結果、当時の殿上の宿直姿は、五位以上の蔵人・殿上人については直衣の着用が一般的であり、彼らの立場を象徴する服装でもあった一方で、六位には直衣は許されておらず、この違いが彼らの地位の違いを日常的に標示していたと思われることが浮びあがってきた。また、「雪たかうふりて」段については、これまでただ雪の日の風景を描いていると思われてきたが、実際には初雪見参という、特別な儀礼を描いている可能性が明らかになった。

小論で取り上げた一つ一つの事象はごく小さなものであるが、各場面を丁寧に読み直すことによって、儀礼や服装について若干の新しい知見を得ることができたと考えている。『枕草子』をはじめとする文学作品は、当時の服装や生活文化を知る貴重な史料ではあるが、本文の確定が困難な場合が多い上に、描写の前提となっている知識を掘り返すことも必ずしも容易ではない。しかし、今後も同様の分析を重ねていくことで、当時の服装や儀礼についての更なる知見を得られることが期待されるであろう。とはいえ、小論の拙い議論において、すでに思い込みや読み間違いも多々犯しているのではないかと恐れている。ここで一旦筆を置き、大方の御批正を乞う次第である。

## 注

- <sup>1</sup> 『枕草子』の服飾研究としては、早くは壺井義知『枕草紙装束抄』（『国文学註釈叢書』2、名著刊行会、1929年等所収）があり、20世紀以降の代表的専論としては安谷ふじゑ『枕草子の婦人服飾』思文閣、1974年がある。また論文も、大庭三朗「枕草子にあらわれた被服を中心とした服飾について」『山口女子短期大学研究報告』26号、1972年3月、浜口俊裕「枕草子における指貫についてのノート」大東文化大学日本文学会『日本文学研究』12号、1974年1月、菊地由希子「『枕草子』にみる男性装束の評価」『愛知文教女子短大研究紀要』18号、1997年、難波めぐみ「平安女流文学に現れる服飾表現について：『枕草子』諸伝本に見る服装」郡山女子大学『紀要』39号、2003年、同『『枕草子』中関白家の栄華と服飾表現』郡山女子大学『紀要』46号、2010年等、多数発表されている。
- <sup>2</sup> 日本の朝廷における男性の宿直装束については、拙著『直衣参内の研究：日本王朝社会の権力と服装』東京大学総合文化研究科博士論文、学位授与2015年9月24日において詳しく検討した。本論文はその成果の一部をまとめ直したものである。

- <sup>3</sup> 『養老令』 公式令・百官宿直条，新訂増補国史大系『令集解』吉川弘文館，1966年，874頁。
- <sup>4</sup> 『延喜式』 中務省式時服条（神道大系『延喜式』神道大系編纂会，1991～1993年，上巻505～6頁）では，宿直（上夜）を勤務評定に計上する範囲として，侍従・次侍従，中務省丞，内舍人，六衛府および兵庫・馬寮官人が示されている。
- <sup>5</sup> 渡辺直彦『日本古代官位制度の基礎的研究』吉川弘文館，1972年，志村佳名子「平安時代日給制度の基礎的考察」『日本古代の王宮構造と政務・儀礼』塙書房，2015年（初出2009年）等。
- <sup>6</sup> 『養老令』 衣服令，新訂増補国史大系『令集解』737～43頁。また『延喜式』 彈正台式等にもさまざまな規定が示されている。
- <sup>7</sup> 芳之内圭「東山御文庫本『日中行事』 翻刻」『日本古代の内裏運営機構』塙書房，2013年（初出2008年），241頁。
- <sup>8</sup> 『侍中群要』 卷一「蔵人初参事」，神道大系『侍中群要』神道大系編纂会，1998年，11～16頁等。
- <sup>9</sup> ただし，位袍を用いた宿衣が「衣冠」と呼ばれるようになったのは11世紀末頃のことと推測される。大丸弘『平安時代の服装：その風俗史的研究』成美社，1961年，114～5頁。
- <sup>10</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』 渡辺実校注，岩波書店，1991年，229～230段，270～1頁。なお，横書きでの引用に際し，一部の表記を改変した。
- <sup>11</sup> 2段落目の「御湯殿の馬道」は清涼殿北西の渡殿にある御湯殿に通ずる通路のことと考えられており，一般的な解釈では，ここから外に出てきた殿上人の様子を，清少納言の仕える中宮定子の在所である登華殿の細殿に置かれた女房の局から見た場面と考えられている。なお，なぜ「北の陣」に向かうのかについて詳しく説明した注釈や論考に管見では触れなかったが，これは北陣（玄輝門・朔平門）に近衛府や兵衛府，衛門府の官人の宿所があったためと考えられる（『西宮記』 宿所条，神道大系『西宮記』神道大系編纂会，1993年，642頁等）。
- <sup>12</sup> ただし能因本系統の諸本では「かめのおび」となっている。田中重太郎ほか『枕冊子全注釈』 角川書店，1972～95年，第4巻285頁等。
- <sup>13</sup> この2段について，萩谷朴は「宿直姿」という連関で随想が展開されたものと評している。萩谷朴『枕草子解環』 同朋舎出版，1981～83年，第4巻444・446頁。
- <sup>14</sup> 五味文彦『『枕草子』の歴史学：春は曙の謎を解く』 朝日新聞出版，2014年，195頁。
- <sup>15</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』46段，67頁。
- <sup>16</sup> しばしば説かれるのが，関根正直『枕草子集注』（六合館，1931年）を踏襲した，「直衣は冬春のものには裏があったので，春の末のころには暑くて着にくいであろう」（新編日本古典文学全集『枕草子』 松尾聰・永井和子校注，小学館，1997年，106頁）という説である。しかし，萩谷朴が指摘するように，位袍も夏と冬の2種があり，裏地の有無についても位袍と直衣に違いがあった証拠はないため，この説には首肯し難い（『枕草子解環』（注13）第1巻469～71頁）。ただし，萩谷が唱える，「うへのきぬがち」とは下着の衣を省いて，直衣の袍のみを着ていることを指すという説にも賛同しない（第4節参照）。私見では，直衣を着にくいのは4月1日の更衣の直前であることと関係があるのではないかと推測しているが，この点については今後の検討課題である（『西宮記』 装束部（神道大系548頁）等に記されるように，更衣の後は蔵人頭が新しい季節の直衣を着るまで，その他の蔵人・殿上人は前の季節の袍や直衣を宿衣に着ることとなっていた）。



- <sup>17</sup> 『西宮記』『侍中事』、神道大系、709～10頁等。なお、実際の運用では、西刻に天皇に供される夕御膳の後は宿衣で殿上にあがることが許されていたと見られる（『侍中群要』巻五「進退往反事」、149～63頁等）。
- <sup>18</sup> 『助無智秘抄』群書類従8、訂正三版、続群書類従完成会、1960年、104頁。
- <sup>19</sup> 山本昌弘「校訂 年中行事秘抄（四）」『大阪青山短期大学研究紀要』11号、1984年、26頁、尊経閣善本影印集成『年中行事秘抄』八木書店、2013年、104頁。
- <sup>20</sup> 中本和「初雪見参と大雪見参」『古代文化』66巻2号、2014年9月。中本によれば、本来は大雪の度に勅計が行なわれるはずであったが、平安京に降雪が少なかったこともあって、勅計が行なわれるのは次第に初雪の日のみになったという。
- <sup>21</sup> 「蔵人式」和田英松編纂・森克己校訂・国書逸文研究会編『新訂増補 国書逸文』国書刊行会、1995年、719～20頁。
- <sup>22</sup> 『侍中群要』巻七「勅計事」、神道大系、228～9頁等。
- <sup>23</sup> 中本はこの祿は武官も含めて雪の清掃等への報酬が目的の一つと論じている（注20）。
- <sup>24</sup> 袍を「ひきはこへ」るのが、雪道を歩くためであるという見解は、すでに萩谷朴が示している（『枕草子解環』（注13）第4巻444頁）。萩谷は「ひきはこへ」ことで「袍や下襲の裾が雪に濡れずにすむが、そこで紫の指貫が目立つこととなる。又、袍の前身頃が、後身頃をたくし上げたのに引っ張られて少し吊り上がることとなるので、下襲の下の方相が、丁度、衣冠姿・直衣姿の時の出だし相のように見えることとなる」と釈している。
- <sup>25</sup> 蔵人には、禁色勅許によって服装における特別待遇が許されており、その一つとして、青色袍を日常的に着用することが許されていた。
- <sup>26</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』73段、83～4頁。下線引用者（以下同じ）。
- <sup>27</sup> なお、「うしろにほころびたえすきたる」については、表記や単語の区切り、また文意に諸説あるが、管見では決定的な説は示されておらず、私見も保留としたい。
- <sup>28</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』164段、214頁。
- <sup>29</sup> 同前189段、242頁。
- <sup>30</sup> 同前273段、317頁。
- <sup>31</sup> 『吏部王記』延長八年八月二十九日条（史料纂集『吏部王記』米田雄介・吉岡真之校訂、増補版、続群書類従完成会、1980年）。なお、小論の主題とは直接関連しないが、この史料に関して、複数の先行研究において示された解釈に異論があるので、この場で触れておきたい。すなわち、引用部分の直前の「〔嵯峨〕天皇崩……〔山田〕春興守先麴塵直衣所未知也」とある部分に対して、嵯峨上皇の崩御後に、山田春興が麴塵直衣を着用したとの解釈が示されているが（大丸弘「禁色勅許の被服学的研究」『大阪樟蔭女子大学論集』1号、1963年11月、157頁、小嶋汀「和様の成立：特に青色について」関東学院女子短期大学『短大論叢』28号、1966年、29頁、同「黄衣とその色彩感情について」『短大論叢』32号、1967年、54頁等）、私見ではこの文章は「守先」と「麴塵」の間で話題が切れている。この記事は全体として、無位の一世源氏が直衣を着て良いか、また殿上間に祇候する際の座次はどうあるべきか、という問いに対する醍醐天皇の返答を記しているが、天皇はまず無位一世源氏の出廷という話題に引かれて、源明と山田春城の故事（『日本文徳天皇実録』仁寿二年十二月二十日条、天安二年六月二十日条参照）を語った後に、麴塵袍や直衣の着用については知らない、と述べているのであり、春城（春興）が麴塵直衣を着したわけではないであろう。

- <sup>32</sup> 大丸弘「禁色雑袍の風俗史的研究」『風俗』3巻3号、1964年2月、茨木裕子「平安朝服飾における聴許の流れ：禁色・雑袍」『服飾美学』23号、1994年3月、佐藤早紀子「平安中期の雑袍勅許」『史林』94巻3号、2011年5月等。なお、先行研究では特に指摘されていないものの、私見では宿直における直衣の着用は、この雑袍宣旨によって可能となったと考えている（拙著『直衣参内の研究』（注2）参照）。
- <sup>33</sup> 大丸弘「禁色雑袍の風俗史的研究」（前注）。
- <sup>34</sup> 『延喜式』彈正台式、神道大系『延喜式』下巻609頁。
- <sup>35</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』85段、115頁。
- <sup>36</sup> 同前84段、113頁。
- <sup>37</sup> 小川彰「禁色勅許の装束について」古代学協会編『後期摂関時代史の研究』吉川弘文館、1990年。特に青色袍については、『西宮記』に「非蔵人無文」（装束部（神道大系548頁））や、「非参議不<sub>レ</sub>服<sub>二</sub>綾袍<sub>一</sub>」（内宴条勘物（同113頁）、『吏部王記』よりの引用）と見えている。禁色勅許は蔵人の他、大臣の子や孫等に特権的に与えられていた。
- <sup>38</sup> 萩谷朴『枕草子解環』（注13）第1巻468～9頁。
- <sup>39</sup> 新日本古典文学大系『枕草子』46段、67～8頁。
- <sup>40</sup> 『養老令』の規定では三位以上が紫、四位は深緋を位色としていたが、平安時代に入ると、次第に四位以上の位袍は黒色になっていった。川名淳子「日本の官職・位階と服色 — 平安朝 —：紫の袍から黒の袍へ」日向一雅編『王朝文学と官職・位階』竹林舎、2008年等。
- <sup>41</sup> 「のりたか」については、従四位下権左中弁藤原説孝説もあるが、現在は橋則隆説が有力なようである。清少納言が軽んじることができ、「くろみたる物」で宿直をするのがふさわしい人物として、筆者も橋則隆説を支持する。
- <sup>42</sup> 夕霧が六位に叙された場面は、「浅葱にて殿上に還り給」と、六位の立場を「浅葱」すなわち緑袍で示した上で、元服前にも昇殿（童殿上）を許されていた夕霧に対して、再昇殿（還昇）が許されたことが表現されている（新日本古典文学大系『源氏物語』柳井滋ほか校注、岩波書店、1993～1997年、第2巻281頁）。しかし、その後の夕霧は、緑袍を厭うだけでなく、部屋に籠って勉強に励むこととなり、殿上人として宮中に出仕する姿は描かれない。続いて大学寮の寮試に合格すると、今度は、雲居雁との恋が父大臣に露顕して引き裂かれる展開となり、やはり出仕は描かれない。
- <sup>43</sup> 新日本古典文学大系『源氏物語』第2巻311頁。
- <sup>44</sup> 吉田真澄「直衣などさま変れる色聴されて」ノート』『緑岡詞林』23号、1999年、高田信敬「直衣参内」『源氏物語考証稿』武蔵野書院、2010年（初出2003年）。
- <sup>45</sup> 高田信敬「直衣参内」（前注）、196頁。
- <sup>46</sup> 五節については様々な方面から多くの論考が存在するが、儀式について論じた近年発表のものとしては、佐藤泰弘「五節舞姫の参入」『甲南大学紀要 文学編』159号、2009年3月、服藤早苗「平安朝の五節舞姫：舞う女たち」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』11号、2011年12月、「五節舞師：平安時代の五節舞姫」同前12号、2012年12月、同『源氏物語』の五節舞姫と史実』『アナホリッシュ国文学』4号、2013年9月等がある。また、特に殿上人の行動に関しては、沖本幸子『今様の時代：変容する宮廷芸能』東京大学出版会、2006年に詳しい。
- <sup>47</sup> 藤原重隆『蓬萊抄』群書類従7、473頁、藤原定家『次将装束抄』群書類従8、255頁、



源通方『飭抄』群書類従8, 142～3頁等。

- <sup>48</sup> 蔵人の服装について詳しい『助無智秘抄』では、五節に際しても、六位蔵人は束帯もしくは衣冠を着るとされている（群書類従8, 105頁）。また、吉田真澄「直衣などさま変れる色聴されて」ノート」（注44）が指摘するように、道長政権期の五節では六位の美服の取り締りがみられる。
- <sup>49</sup> 『源氏男女装束抄』下、宮崎和広編、宮廷文化研究：有識故実研究資料叢書7、クレス出版、2005年。『源氏物語』の描写がしばしば虚構であることについてはさまざまな箇所について広く指摘されているが、特に服飾に関する論考としては、末松剛「中世源氏学における赤色袍理解について」『日本歴史』635号、2001年4月等がある。

